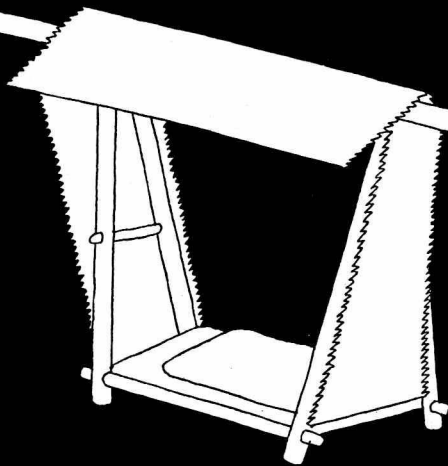


文芸評論

時代小説

武蔵野次郎

春陽堂



文芸評論時代小説

0095-300002-3066

定価八四〇円

昭和四十八年九月二十五日第一刷発行©

著者 武蔵野次郎

発行者 和田欣之介

印刷所 三協美術印刷株式会社

製本所 有限会社丸山製本所

発行所 株式会社春陽堂書店

東京都中央区日本橋三ノ四ノ一六 振替東京二六七番

落丁・乱丁本はお取り替えます。

乾 盃 の 辞

萱 原 宏 一

武蔵野さんを識ってちょうど十七年になる。私が武蔵野さんを識ったのは昭和三十二年の正月であった。そのころ私は「風信」という大衆文学を主にした、小さな個人雑誌を出していた。それへ富永新平という未知の人から「いろは骨牌」と題する短文を寄せてきた。

読んでみると、かるたには自分の好む札は絶対に逃かさない、必らず取^とってみせる得意札がある。それだけにこれらの札に言ってみたいことがあると前置きして、柴田錬三郎、南條範夫、五味康祐、山本周五郎の四枚の札を挙げ、四氏への期待と要望を述べたあとで、手に取った四枚の札をしげしげと眺めていたら、いつの間にか「かるたとり」は終っていたのです。と結んであった。

短文は富永氏が多くの作家の中から、特に四氏への瞩目が大きいことを示していると同時に、不勉強の作家に対して、それとなく奮起を促していた。

私はこの短文に心をひかれ、喜んで「風信」の一月号に掲載した。そして「かるたとり」など

という、心憎い洒落た方法で、好個の大衆文学批評をした、富永新平氏に強い興味を持ち、打合わして明治大学の下の喫茶店で初めてお目にかかった。

富永さんが当時主婦之友社の編集部に在籍せられていることや、福岡県のお生れで、早稲田大学の法学部の出身であることなどを、そのときに知った。

それらはともかくとして、話合っているうちに、私はたいへんなことを知ったのである。それは富永さんが、大衆文学について、恐るべき知識を持っておられることへの驚きであった。

ことに大衆文学を広く読んでおられ、その涉獵の範圍が月刊誌、週刊誌はもちろんのこと、都下の大新聞から地方新聞までに及んでおられることは、驚きを通り越して、ほとんど信ぜられないくらいであった。こんな人が世の中にいるのかと目を見張ったが、その人は現に私の目の前にいて、訥々と地方新聞の小説の話をしているのである。

感銘した私は、これこそ大衆文学の批評家（推進者）として、得がたい人であると思った。必ずこの人は評論家として、名を成す人にちがいないと思った。

当時「風信」の月評欄は、村雨退二郎と松本清張氏であったが、私は富永さんに特にお願いして、月評を引受けていただいた。お忙しい中を、一文にもならぬ厄介な批評を、嫌な顔もなさらず書いて下さったご厚意は、いまだに忘れない。

それからどれくらいの月日が流れたであろうか。武蔵野次郎という、大衆文学の批評家が現わ

れたことを私は知った。そうして武蔵野氏が、富永新平氏であることも併せ知って「ああ、やっぱり、出るべき人がついに出たか」と、若干の感慨を催しながら、快心のことになった。

文壇の冷嘲と蔑視を浴びながら、大衆文学に信念を持って推進してきた、多くの先人たちの中で、直木三十五は輝ける旗手であった。直木さんは大衆文学に批評のないことをつねに慨歎し、自ら批評の筆を執り、八面六臂の働きをした。

やがて長谷川伸グループの「大衆文藝」や海音寺潮五郎氏らの「文学建設」の両誌が興るに及んで、大衆文学の批評は大に行われることになった。それにつれて大衆文学は徐々に確固たる地歩を占め、今や大衆文学と純文学を区別すること自体が、無意味であるというところまで発展し向上した。

批評がないということは無視である。無視された文学が、文学としての独自の存在を主張することは不可能である。その意味で批評は、文学の存在と発展に欠くことのできない機能である。

大衆文学においては、武蔵野さんと尾崎秀樹氏が、その方法論の違いはあるとしても、右の機能を果しておられる。ここ十数年間の大衆文学の成長と向上に、お二人の尽くされた献身は、感謝をもって記憶さるべきである。私は本書が明日の大衆文学発展のための、記念すべき一里塚となることを期待し、高く盃を挙げて、武蔵野さん「お目出度う」と申し上げたい。

目次

I 部

時代小説に見る「居合」の妙技

3

日本名勝負三件

39

劍聖「武蔵」を斬る

58

近藤勇の刀

72

死の演出者

——大石内蔵助・

幕閣を吞む男

——栗山大膳

102 83

時代ミステリあれこれ

116

II 部

時代小説の本道を歩むもの

——柴田鍊三郎・人と作品

131

山岡荘八と『高杉晋作』

157

川口松太郎

——『蛇姫様』と『振袖御殿』

177

吉川英治と国民文学

191

「股旅もの」作家

204

立川文庫傑作選

218

I 部

時代小説に見る「居合」の妙技

「居合」の面白さは一瞬の間に敵を倒すところにあるのだから、鎧兜に身を固めて闘った戦国時代の戦場では、おそらく通用しないだろう。居合だけでなく、刀法全般にわたってそれはいえることであって、鎧を着用した戦場では、打つ、突く、取組むと、身体が巨大で強い力の持主だけが真に強い豪傑であったのであろう。だから、兵法の名人、達人として喧伝され、その者の称える流派が出だしたのも、大体、関ヶ原役以後であるのも当然のことである。

徳川の世となり、世が治まってくるに従い、単に豪傑といわれるだけでは魅力がないので、そこに種々の剣法の工夫が加えられていったであろうことも十分に想像される。「居合は刀操法の術であるとともに、手のうちで勝負するのが本領である」といわれるだけに、つきつめれば「刀身が鞘の中にあるうちに、すでに勝負はある」ということにもなってくるであらう。

こうなってくると「居合」の面白さは、多分に小説的興味を喚起してくることになるのも当然であって、時代小説、特に剣豪小説には恰好の剣法となつてこよう。五味康祐などによって巻き

起された剣豪ブームといったものも、従来の大衆文芸が使っていた講談調の“エイ”“トウ”“チャリン”といったあんばいの単純きわまる剣戟描写にかわって、「居合」の妙技などを巧みに使用した新鮮な殺陣描写が近代人の感覚にアピールしたところに、大いに受けた原因がある。

では「居合」がどのように時代小説に採り入れられているか、数例の作品のハイライトを、まず五味康祐の作品から見て行こう。

五味康祐『寛永の剣士』

寛永の頃、筑前黒田藩に横目役を勤める丸尾六左衛門という士さむらいがあった。この六左衛門が「居合抜き」の名医である。六左衛門は兄田宮長勝の末子数馬を跡目に迎えることになっているが、長勝、六左衛門兄弟の父が、世にいう田宮流（居合）の流祖、田宮重政である。六左衛門も父重政に就いて幼少から家芸を修めたが、はやく丸尾の姓を冒して豊前に住んでいたから、六左衛門を居合の流祖の子と知る者は少なかった。

六左衛門が主君の忠之に披露したのは、大方は「横雲」と呼ぶ早抜きの居業いわざである。刃を下にして太刀を帯び、抜く手も見せず畳の上八寸まで打ちおろす。その時、咽喉笛の斬られるような唸りが生じた。六左衛門の太刀には深く樋が搔いてあったので、その樋が風をはらんで鳴るのである。或る時、藩士の一人が、それぐらいのことならと六左衛門の太刀を取って両手で振った

が、唸りは起らなかったという。

世は徳川の天下となり、しだいに戦塵も収まると、どうしても部屋の中での斬合を重視しなくてはならなくなる。部屋で斬合って鴨居に打ち込んだりしないためにも、技巧というものは必要である。柳生宗厳や伊藤一刀斎等が出てそれぞれ優れた兵法を編んだが、田宮流もその一つである。ただ他の流派と違うところは、凡その兵法はすべて太刀を抜き合って試合するが、田宮流は抜いた刹那に早や勝負を決している。鞘離れの一瞬をすべてとする居合斬りは、最も進んだ剣法ともいえるわけである。

寛永九年二月、熊本城主加藤肥後守忠広が逆心を企て、ひそかに密使を遣して諸国の趨勢をうかがったことがある。その時、黒田藩へも中条左馬之亮という剣客が武者修行に名をかりて来た。左馬之亮は忠広の直筆を携えていたから、黒田家でも粗忽のないよう扱い、種々供応の上、さて黒田家の心得者と武芸試合をする運びになった。

左馬之亮は肥後守がわざわざ目をかけるほどの剣客とあっては、こちらが敗れた場合、家名に関わる。最初に相手に出た児小姓は忽ち敗れた。次に立ったのが六左衛門である。袴姿かみしもすがたのまま用意の木太刀を取ってすぐ庭へ出た。居合は、一般には木太刀は使わぬものである。六左衛門は思うところがあるから、平気で木太刀を腰に差すと左馬之亮の前に立った。双方向き合ったが、いつまでも相手が木太刀を抜かぬので、中条は困った。相手は居合抜きと分ったが、木刀であれ、

相手の抜かぬ前に打ち掛るのは卑怯という気がある。間合だけを十分取って、だらりと右手の木太刀を下げた。六左衛門は身をぶつけるようにその手許へ躍り込んだのである。柄に手は掛けたままである。左馬之亮は思わず一步退きながら、防禦のつもりで六左衛門の肩を打った。一瞬遅れて六左衛門の抜打ちも左馬之亮の胸に届いた。奇態な相打ちである。

六左衛門の自分が勝ったのだという声に、左馬之亮は口を歪め、真剣勝負を申し出た。両人は刀を受取ると再び相対した。左馬之亮は八双の構えから、抜打ちを用心しながら、詰め寄って来た。ほぼ二人の間が一間余にせまったとき、「掛け」六左衛門が叫んだ。

「お手前の負けじゃ」

「何と？」

「勝ちはやこの鞘の中にある。見えぬか」

「たわけたことを」

「抜かねば、見えぬか。田宮流抜かずの極意ぞ」

「推参な」

左馬之亮は気合もろとも斬り掛った。

同時に鞘走った六左衛門の抜打ちが、空に、一条の仄白い流れを描いた。左馬之亮は頭上から水月のあたりまで一気に斬り落されて、即死した。一同呆然と、血振いをする六左衛門を見守る

ばかりである。

翌日、左馬之亮の死を熊本へ通達したが、左様の者当家に関わりなく、委細打ち捨て被下度、という案外の返しである。六左衛門はこの時の賞として時服および銀十枚を拝領した。

島原の乱がしずまって、出陣していた主君忠之以下が帰国した頃、六左衛門のところに養子になる甥の数馬も到着した。数馬は君前の覚えもめでたく初の伺候を済ませた。十七歳とは見えぬ偉丈夫で、さすが長勝の子だけあって予期以上に腕も立つ。丸尾家は季節にさがけ、一朝にして春が訪れたようである。九月吉日を卜して数馬に嫁をもらい、できれば年内に跡目相続の件を相済ませたい旨も六左衛門は願ひ出た。

ところが、その挙式も迫った八月下旬、六左衛門の身に一大事が起った。新免武蔵との試合である。武蔵は、父宮本無二斎がかつて黒田利高（忠之の祖父官兵衛の弟）に仕えたこともあり、黒田家とは縁故のある間柄であったが、この頃、福岡へ立寄って、黒田家へ仕官の意を洩らしていた。武蔵といえど天下に聞えた剣客である。忠之は武蔵を召抱えたいと思ったが、老臣たちの反対で思い止まった。しかし、かりにも大名の身で、一旦召抱えると約したものを、理由なく取消すわけにはゆかぬ。一同頭を痛め、思いついた窮余の一策が、誰か武蔵と試合して立負かせばよからうという事である。その相手に、丸尾六左衛門が選ばれた。

六左衛門が小川権太夫宅に新免武蔵をおとずれたのは翌々日、八月二十四日辰ノ下刻である。

高名の新免武藏どのが当家に滞留とうかがって、お手合せ願いに参った、——玄関でそう六左衛門はいった。武藏は六左衛門の申し出を快く迎えた。武藏は眼がくぼんで、荒髯の、頬骨の張った異相を帯びた男である。この時、五十四歳である。円明二刀流を使った。

六左衛門は、この試合は真剣を所望したいものじゃ、といった。庭へ立ってからである。太刀を抜き放つと、武藏は、身を飛び退いて刀の柄に手を掛けた六左衛門の、猫背からうかがうような様子を、穴のあくほど凝然とにらみすえた。そのまま動かなかった。六左衛門も動かなかった。この時、天雲にわかに乱れてバラバラ雨が降って来た。雨勢は忽ち瀑布を招いた。

「早やかかれ、武藏」

六左衛門は雨の中に叫んだ。その口が無数の雫を吸い込んだ。武藏は巖のように動かぬ。全身ぬれ鼠の相手が、六左衛門には見える。たまりかねて雨の中を六左衛門は進んだ。武藏はあわててとび退いた。進むと、またとび退いた。

「見えたぞ。……お手前の鞘の勝ちじゃ」

とうとう武藏は叫んだ。ほっとして、六左衛門は張っていた気がゆるんだ。脱兎のように武藏は躍り込んだ。六左衛門の首は雨の中を飛んだ。

後で、六左衛門の遺骸を運ぶ時、足許を泥濘ぬかるみにとられた生々しい滑り跡があった。太刀は見事に鞘を離れていた。武藏の左腕にのこった傷は、この鞘離れに受けたものである。武藏は、その

後、半年余りもお滞在したが、仕官の望みがかなわぬと知ると、熊本へいった。

*

この作品においては、作者は主人公丸尾六左衛門に二度試合させ、絶妙の「居合」の技をふるわせながら、しかも雨中という悪い状態を設定し、詐術的に試合のうまい武蔵のかけひきのために、ついに六左衛門が敗れるさまを見事に描いている。

ここに出てくる「田宮流」とは、神明無想東流の東下野守元治の門人で、よくその宗を得た田宮対馬守重正が称した流派であり、流祖田宮重正から五代目次郎右衛門成道までの代々の総称を「古田宮流」ともいう。重正は林崎基助重信について抜刀をも学んだ。

富田勢源につき富田流小太刀を学んだ佐々木小次郎の有名な「つばめ返し」の秘剣も、居合ととってもよからう。富田勢源は、富田治部左衛門景政の子であり、越前宇坂の荘、一乗山淨教寺村に生れた。父祖の芸を継いで刀槍の術にすぐれていたが、眼疾のため流派を継がず剃髪して、富田五郎左衛門入道勢源と号した。佐々木小次郎は師勢源の小太刀とは反し、長刀を自己が好み出した「つばめ返し」の妙術でふるったさまは、さぞ華麗なものであったと想像される。

村上元三『佐々木小次郎』

越前淨教寺村のあたりは、朝倉義景の城が一乗山にあったころまでは賑わっていた土地だった

が、朝倉家が滅んでから久しく、徳川二代秀忠が征夷大將軍となつてゐるこの慶長十一年というときは、すでに越前の山間のさびれた一部落にしかすぎなくなつてゐた。近江で拾われ、ここで富田勢源に育てられた佐々木小次郎は、己れの劍の真価を問うべくこの村をとびだして、越前宰相秀康の居城のある福井の城下へと向う。

小次郎と相愛の仲となつてゐる兎祢には伊之瀬東馬という許婚者があり、東馬は三年間の武者修行から戻つて来たところに小次郎の出奔を聞き、兎祢の兄兵介とともに小次郎の後を追う。福井城下に現れた小次郎は富田流の正統をつぐ越後守重政と、その弟山崎左近將監に、自分の腕前を試してくれと申入れる。左近將監に勝つた小次郎に対し富田越後は冷たく告げるのであつた。

「それだけで、世の中へ出られると思ふのか」

「わたくしには、おのれの力以外、いまのところ、頼るものはございませぬ」

「自分に足りぬものが何か、わかつてゐるか」

「これから、それを知りたいと思ひまする」

「そのほうに、この後、富田流を名乗ること許さぬぞ」

そのまま奥へ入つてしまつた富田越後を、片ひざを上げたきり、小次郎は、そのうしろすがたをにらんでいた。越後の冷たい態度が了解できず、怒りがこみあげてきた。

これから佐々木小次郎の放浪の旅が始まつた。大坂へ出ても、江戸へ出ても、小次郎の夢を充